本と人・人と人との絆を結ぶ互恵的な読書環境の創出

水野 邦太郎(kmizuno@sfc.keio.ac.jp)
慶応大学・上智大学・神田外語大学，非常勤講師

1. 日本の英語教育の基本的問題

英語は，日本人にとって日常生活では通常使われない外国語である．この事実が「英語を使う機会」と「英語に触れる量」が極めて少ないという学習上の困難を引き起こし，日本人の英語力の低さのいちばん大きな原因となっている．そこで，「英語に触れる量」を増やすための方策として，多読プロジェクトを慶応大学と上智大学で 2000 年より実践してきた．この多読プロジェクトでは，「アマゾン・コム」などのオンライン書店サービスを参考にして，IRC(Interactive Reading Community)という Web アプリケーションを開発し(http://www.sfc.keio.ac.jp/iwc/IRC/)，一人ひとりの読みが，クラスや大学の壁を越えて交わり合う「仲間と読み合う互恵的な読書環境」を築いてきた．その取り組みを紹介する．

2. 日本のリーディングの授業の問題点

大学の通常のリーディングの授業では，読書という行為を「正統的に行う」ことができない．すなわち，普段の日常生活で行っている日本語の読書と同じ在り方(本来の・ホンモノの読書の在り方)が尊重されない．まず，教師によって 1 冊の本が指定される．しかし，その強制された本を読んでみたいと思う学生はどれくらいいるだろうか．さらに，その本は，多くの日本の学生にとって難しく苦痛を強いられ，楽しんでストーリーを読み進めていくこと(Reading for Pleasure)ができない．その結果，読む量が少なくなる．また「教科書」が指定され，レッスンごとに「問題」に従って読まされ「テスト」のために学生たちは英文を読まされる．

さらに，大人数で一斉授業(モノローグ)のスタイルをとることが多いため，一人ひとりが自らの独自の在り様を活かして授業に「参加」し「互いに影響を与え合い学び合っている」という実感や「帰属意識(学びの共同体)」が生まれることがない．換言すれば，教室という場所で，本や人との「出会い」と「対話(ダイアローグ)」を通した「全人格的な意味での自分づくり」が行われることがない．

3. 自律的な読み手を育てる

この多読プロジェクトには Reading for Pleasure という授業名がつけられているが，Pleasure には，delight, satisfaction という意味と，one's wish, will, or choice という意味がある．したがって，授業名には，読み手である私たち一人ひとりが「自分の意思で本を選択」したとき，「読む」という行為が「快楽」となるという意味が込められている．この意味で，学生が 30 人いれば，30 人の教師(本)を自分の力で選び，自分の力で学んでいくのが本当の意味の読書であるといえる．このように「一人ひとりが自分のニーズや希望に

役に立つように賢い選択ができるようになる能力を育てる」こと，すなわち「自律的な学び手(読み手)を育てる」ことが，多読の授業の存在意義であると考える．

4. 量への挑戦 ： リーディング・マラソン

多読の授業のもう一つの存在意義は,「英語に触れる量」を増やすことにある．特に大学で英語を専攻としない学生たちにとっては，英語の授業が英語に触れるほとんど唯一の機会になる．そこで，英語に接する分量を増やすための工夫として，学期を通じて楽しみながらゲーム感覚でたくさん読む競走ができる「リーディング・マラソン」を実施し量不足を補う． 各本に「読破距離数(400 語を 1km とする)」を表示する．マラソンの「ゴール」として，単位を取得するには 13 冊以上あるいは 130km 以上走破すること，A が取れる必要条件として 18 冊以上あるいは 180km 以上走破する，という具体的な数字を学期始めに示す.

5 「勉強」から「学び」型授業への転換

多読の授業を実施する際，学生たちは授業以外の時間を使って自分の選んだ本をマイ・ペースで自由に読み進めるため,「週に１度集まる教室で何をやるのか」ということが重要になってくる．この「教室」という場所をどう利用するかという問題について考察する．

これまでのリーディングの授業は，黒板に教師が書いたことを書き写し，教師や教科書が提供する知識を理解し記憶する「勉強」であった．この「勉強」の文化から決別して自律的な「学び」型授業への転換を実践するために，教育学者の佐藤学は，三つの次元における「出会いと対話」が授業の中に組織される必要があると提唱している．

一つは「モノ(教材，あるいは対象世界)」との出会いと対話，そして「他者」との出会いと対話,「自分自身」との出会いと対話を指す．これら三つの①「世界づくり」②「仲間づくり」③「自分探し」の三位一体論として，佐藤は「学び」の実践を定義している．こうした「三つの対話的実践」を多読の授業においてどのようにデザインすることができるか，具体的な方法とその教育的意義を示してみたい.

①の「世界づくり」は，多読の授業では「本」との出会いと対話を通して遂行される．学生たちは，学期を通して様々なジャンルの「本」と出会い，テクストの中で「英語独自の思考様式・表現様式」と出会い，物語に登場する色々な「出来事」や「人間」と出会い，対話をする．

②の「仲間づくり」は，教室での「ブックトーク」を通じて実践される(使用言語は日本語)．毎週，メンバーを変えて 4 人ぐらいのグループをつくり，それぞれが今週読んできた本を紹介し合う．こうしたブックトークの時間(20～25 分)は，次のような「状況的な学び(Situated Learning)」を創出する．

まず,「仲間に本を紹介する」という状況に埋め込まれることによって「この本のどのエッセンスを伝えれば，うまくこの本を紹介できるか」という良い課題意識が生まれる．そ

うした状況の中で，一人ひとりを本と真剣に向き合わせることができる．さらに，グループの仲間に自分の＜読み＞を物語ることができるかどうかを通じて，自分のその本に対する理解度をチェックすることができる．

学びは，「聴く」という能動的受動性に基盤をおく活動である．自分の言葉に慎み深く耳を傾け反応を返してくれる「応答的環境」の存在が欠かせない．「聴き合う関係」が教室という場所に築かれていく中で「やる気」が作られ，一人ひとりがマラソンを続けていくことができる．

さらに，物語が放つメッセージを「自分はどう受け止めたか」を他者に語ることは，その本を媒介にして自らの人間観や社会観，自然観が語られることになる．グループの中で，一人ひとりの個性的な考えが交流され「他者性」と遭遇することになる．この「差異化としての学び」の実践を通して，異質性を大切にし他者の視点を取り入れながら，互恵的に協同で学びあっていく授業づくりを実現させていくことができる．

③の「自分探し」であるが，学びは，対象世界との出会いと対話，他者との出会いと対話を通じて，自己のあり方を反省的に吟味する「自分探し」のプロセスである．この「自分探し」のプロセスを活性化するために，この授業では自分のお気に入りの本について，その魅力，その本への思いを語る Reaction Report を書いている(日本語で，量は自由，本からの英文の「引用」を必ず行う)．そして，この書く活動を，教室における仲間との＜読み＞の相互交流を豊かにするための準備へと位置づけている．

「書く」ことは，自分の＜読み＞を振り返らせ「言葉との出会い」を心に刻み直していく働きをもっている．この「自分のわかり方を作品化する」プロセスを通して，自らの存在と出会い，物事に対する見方，感じ方，価値観が形成されていく．

一方，Reaction Report は自分のためだけに書かれるのではなく，Interactive Reading Community というサイトに投稿され，他のクラスや他大学の仲間が次に読む本を選ぶときの重要な資料として利用される．自らの Reaction Report が，この本の今後の「運命」を握っているということの自覚は，書くことへの大きな動機づけとなる．「いかにして，この本の良さ，面白さを余すところなく伝えることができるか」「どうしたら，読んでみたいという気持ちにたまらなくさせられるか」という「強い思い」が，＜読み＞を引き出し，その本に対する解釈を豊かにしていく．

このように，この多読プロジェクトでは「三つの対話的実践」が重層的に響きあうよう授業がデザインされている．そして一人ひとりの，自分の好きな本を読む幸せと，その好きな本について語る喜びが掛け算のように掛け合わさって，教室という場を生き生きとした「学び合う共同体」にしていくことを教師が誘うのである．

6. インターネットを活かした本と人・人と人との出会いと対話の実践的な支援

教室での読みの交流は人数の多さ，時間の面から限られている．そこで，教室で直接コミュニケーションをとれなかった仲間と，さらに他のクラス，他大学の仲間と交流し合え

る環境，IRC(Interactive Reading Community)というサイトを開設した．すべての本にその本専用の電子掲示板が設けられ, そこにその本に対する自分の Reaction Report が投稿でき，自分の読みを仲間たちの読みと比較することができる．そして，互いにコメントをつけ合うことができ，読みを「深化」させることができる．

また,「自律的な読み手」を育てるにあたって重要なポイントになることは,「本の選択の仕方」を学ぶことにある．そこで，IRC 上で未知なる本との出会いと対話がうながされるように「9 つの仕掛け」が IRC には張り巡らされている．IRC がオススメの本を色々な切り口から「イモズル式」にユーザーに紹介し，本に関する多様な情報に自由に触れることができるリソースが巧みに組み込まれた読書環境が構築されている．

さらに，読了後，Reaction Report を書きそれをその本専用の電子掲示板に投稿すると，その本の読破距離数が Reading Marathon のページ上にある自分の名前に加算され，グラフが自動的に伸びる仕掛けになっている．また，読破冊数を示す Reading Stars のページにも☆が一つ加算される．このように，読書量が「外化」されていくので，IRC に参加しながら「達成感」を感じることができ,「もっと読もう」「これだけ読もう」と自律的に目標を設定して達成したいという「達成動機 (Achievement motive)」を育む効果もある．

7. 多読プロジェクトの結果

2004 年秋学期は，95%の学生が 130km 以上あるいは 13 冊以上読んで「ゴールイン」した．読破距離数の平均は 336km(ペーパーバック 1 冊の量に相当)，読破冊数については平均 12 冊で，1 週間に平均 1 冊のペースで読み終えていったことを意味する．

本を読む習慣を持たなかった学生たちが，この多読プロジェクトに参加していくなかで毎週 1 冊のペースで本を読み読書を「習慣化」し「自律的な読み手」に育っていくことができたのは，かつ，3 ヶ月でペーパーバック 1 冊以上の量を読破することができたのは，一人ひとりが本来の(ホンモノの)読書を行うことができ(「正統的」に読書という行為を実践することができ)，かつ，いきなり「原書」ではなく，Graded Readers のような「周辺的な読み物(Learner's Literature)」 を読み進めながらこの多読プロジェクトに「参加」して“ Reading for Pleasure ”を経験することができたからである．そして,「教室」という場所や「IRC」を媒介にして，洋書を通して「世界づくり」「仲間づくり」「自分づくり」の絶えざる「対話的実践」を遂行していくことができ「本を読む意味」を見出していったからだと思われる．

このような「正統的」に「周辺的」に「洋書(読書)好き共同体」に「参加」していく多読プロジェクトを，大学，さらに高校・中学の英語教育のカリキュラムの「一環」として正規の授業の中に位置づけることによって, 生徒たちにとって英語を学ぶことが,「試験合格」「単位取得」といった「交換価値」から，英語の本を“ appreciate＝understand and enjoy the good quality of something ”し合い，自らの読みを表現し共有し吟味し合う「学び(文化的・教育的価値)」へ転換させていくことができると考える．